



社会人が海外で学ぶことの成果とは



<カタールの
ファイナンシャルセンターにて>

皆様初めまして。柳野国際特許事務所の弁理士の柳野嘉秀と申します。

私は、2015年7月から2016年10月まで、イギリスのボーツマス大学大学院 “MSc Innovation Management and Entrepreneurship” というコースで学んでいました。世の中に、留学をしてみたいという方は大勢おられると思います。私は幸運にも今回の機会を頂けましたが、現実的なところで様々な障害があり、断念してしまう方もまた多いと思います。また、たとえ留学したとしても、具体的にどのような成果があるのか明確な答えが得られず、二の足を踏んでしまうケースも多いと思います。

そこで、私自身の経験をお伝えすることで、特にこれから海外に出ていきたいと思っている皆様が具体的なイメージを抱けるお手伝いができればと思い、今回寄稿させて頂くことになりました。早速ですが、留学における成果とはどのようなもののでしょうか。私は、大別すると有形の成果と無形の成果の二つがあると思います。このうち多くの人が求めるのが有形の成果で、例えば、TOEICが〇点になった、〇〇という資格がとれた、大学の成績が優秀だった等です。しかし、個人的には、こういった有形の成果より、無形の成果の方が大切なものであると思いますし、また無形な成果を得ようとする中で、その結果として有形な成果もついてくるということもあると思います。例えば、私はイギリスで多くの異国の友達がたくさんできましたが、短絡的にはそんな彼らと話をしている、有形の成果を得ることはあまりありません。しかし、例えば海外の異文化の人たちと話すことにより、全く違う視野を得ることができます。この視野や考え方を、日本では得ることのできない無形の成果の一つだと思えます。

具体例として、中東出身の友人と話をしていて、宗教の話になりました。日本では仮に何らかの宗教を信じていたとしても、生活は生活、宗教は宗教と線引きされているケースが多いと思います。従って、日本人が例えば仏教徒と言っても、そもそも禁忌を知らないことが多いですし、知っていても常に禁忌を避ける、という人は珍しいと思います。しかし、中東の人たちの多くは、敬虔なイスラム教徒です。彼らにとり、コーランに書いてあることは正しく、それに従って生活をしなければならないということです。人によっては、生活が宗教のためにあるといっても過言ではない人もいます。従って、コーランに書いてある禁忌を知らないということはありませんし、禁忌を破ることも当然タブーになります。同じ宗教といっても、日本人の考え方と、中東の人のそれとは全く異なるわけです。

こういった考え方や文化の違いは、海外で生活する場合は勿論、仕事をする上でも絶対を知っておかねばならないことです。文化の違いは必然的にマーケットのニーズの違いにつながります。極端な例ですが、お酒を飲むことが禁忌の国に、どれだけ高品質のお酒を売り込もうとしてもマーケットはありません。マーケットのニーズを掴むためには、時として日本の常識=他国の非常識、であることを知らなければなりません。

勿論、そのためには英語力も必要です。異文化に興味を持ち、積極的に交流をする中で、必然的に英語力も向上し、有形の結果も得られることとなります。

日本にも多くの外国人が訪れるようになり、同僚に外国人がいる企業も珍しくなくなってきているかもしれません。

しかし、(よほど積極的に交流しようとしなければ) いまだ日本で知りうる人の99%は日本人です。日本人同士では、基本的に大きく考え方の異なる人が少ないので、考え方の違いが表面化することが少ないです。以心伝心、といった言葉があるのもその典型です。

しかし、海外の人とコミュニケーションをとり、仕事をしようとする際に、異文化への不理解は摩擦を呼ぶ原因にもなってしまいます。

もし、今海外に留学に行こうか迷っている方がおられましたら、こういった無形の財産を手に入れられる可能性があることを、是非念頭に置いて下さい。また、これから海外市場に挑戦したいと思っている企業がありましたら、是非、社員の方に海外の文化を体験させてみて下さい。そしてその際に、具体的な成果のみを求めるのではなく、無形の成果の重要性も理解して頂ければと思います。

今後海外に挑戦してみたいという方々や企業にとりまして、この寄稿が少しでもお役にたてれば幸いです。

柳野国際特許事務所 弁理士 柳野嘉秀

~VEC市川隆治理事長のコラムから~

2017年1月18日付VECニュースリリース「コラム-DECA-」に掲載の当財団市川理事長シリコンバレー視察でのレポートをご紹介します。「日本でもまず高校生のときから世界に並ぶ起業家マインドが必要で世界に伍する起業家を日本から排出」のコラムであります。

◆コラム — DECA — 2017年1月18日

VEC東京本部 理事長 市川隆治

今年の正月は大変忙しく、また、有意義な時間をシリコンバレーで過ごすことができた。Harker高校を訪問し、生の高校生起業家教育の一端を拝見した。日本ではおおよそ考えられない、聞いている人のエモーションに訴えるプレゼンテーションの仕方とか、株やクレジットカードの使い方といった極めて実践的な内容に、教師が熱く語りかけ、生徒も積極的に質問していた。“Active learning”の模範のような授業であった。また同校のExecutive DirectorのRosenthal校長との昼食会の時の話題では、彼等の考えているのは、飛び抜けた生徒のサポート(マイクロソフトのイベントのGuest Speakerで授業に参加できない生徒)と高校生では遅いと考える起業家教育をどのように中学レベルに導入すべきかといったトピックスだったのには驚いた。もう日本との差は何もしなければ広がるばかりだと感じた。

さらに翌日、全米でビジネス界における次世代リーダーを育成するためのプログラムである“DECA”のシリコンバレー地区大会にも参加することができた。地区大会だけで700人を超える高校生が参加し、それぞれ20科目はあるマークシート試験や面接試験、さらにはビジネスプラン作成試験に臨んでいた。私が参加した面接試験では、試験会場と与えられる課題について10分間問々とプレゼンテーションをこなし、審査員の質問にも回答しなければならない。DECAのキャリアクラスターは、大きく、①マーケティング、②マネジメント、③ホスピタリティとツーリズム及び④ファイナンスといった4つから構成されており、この点でSAT(Scholastic Assessment Test)やACT(American College Testing)といった他の能力試験と差別化されている。米国の大学では広く認知され、入試に際してもDECAでの活躍は評価されるという。1946年に設立されたDECAは、米国教育省の認可を受けており、今やカナダ、ドイツ、中国、韓国等にもその活動は広がり、全世界で20万人を超える高校生がDECAに参加しているという。しかし、残念ながら日本の参加は見られない。

起業家教育というと通常大学や大学院レベルを想起するが、実は日本においてはもっと前の段階から考える必要があると思う。高校を卒業するまで全く起業やビジネスについての学習もなく、大学に入学したからといっていきなり起業家教育と言われても学生たちは関心を持ちようがない。

GEM調査(Global Entrepreneurship Monitor)における起業活動率(各国の起業活動の活発さを表す指標:TEA:Total Early-Stage Entrepreneurial Activity)において、日本は毎年最下位から数えた方が早い位置に甘んじているのはそのためではなからうか?

国民全体に起業についての関心が低い。受験戦争に勝ち残り、いい大学から大企業に就職するという安定志向路線が成功してきた期間が余りに長かったため、大企業もかつてはベンチャー企業であったこと、大企業と雖も激動する世界にあっては大海の小舟のように不安定であることを忘れてしまっている。思うに、「起業」とは、芸術やスポーツのように、素質のある人物に必要な知識と訓練を提供し、うまくチームを組んで成功を達成するものではないだろうか?芸術やスポーツにおいては高校生やさらにその下の段階で、コンクールや国体といった場が提供され、切磋琢磨して優勝をめざす。その切磋琢磨があるからこそ技能が磨かれ、世界の舞台でも活躍できる素地ができあがるのではないだろうか。

DECAは正に高校生における起業分野における切磋琢磨の場である。やることはマークシート試験や面接試験であるが、そのノリはまるで体育会系である。開会式で学校別の余興があるが、自校の代表が舞台上上がるとフロアから大歓声が挙がる。それが試験になると服装もジャージからスーツにネクタイと、ガラッと変わり、プレゼンテーションは真剣そのものである。ちなみにシリコンバレーという土地柄、インド系と中華系が白人よりも多いという印象を受けた。生徒たちは顔の色に関係なくふざけ合い、談笑しているようであった。試験が終わった夜はダンス大会だった。絨毯を気にしてか、大ホールの真ん中に板が敷かれ、その上だけが彼らのロックに興じる舞台となる。今後は、高校生のentrepreneurship世界標準ともいべきこのDECAの活動に日本としても参加し、まず高校生のときから世界に並ぶ起業家マインドを持ってもらい、その上で大学・大学院における起業家教育でさらにビジネス実務に近い技能を磨き、世界に伍する起業家を日本から輩出するようにできればと考えている。

(注) DECAはDistributive Education Clubs of Americaの略であるが、70年前の元々の名称の意味は薄れ、DECAだけで通用していると聞いている。

(VEC HPより)

◆トピックス

～株式会社アトラステクノサービス 代表取締役 鯛かおる氏が「関西財界セミナー賞2017」で「輝く女性賞」を2月10日（金）国立京都国際会館で受賞～

多方面にご活躍中でVEC交流会にも参加されています鯛かおる社長が今年を受賞者6名の中に選ばれました。特許商品である「ろ過装置」の技術力や女性経営者・技術者としてのご活躍、栄養士やフードコーディネーターのスキルをいかした農業産品のブランド化などが高い評価を得た受賞です。これからもさらなるご活躍を期待いたします。

VEC 関西支部 事務局

観光都市・京都を読み解く方法－醍醐味の〈場所(トポス)〉

京都市東山区の高台寺から清水寺に向かう「二年坂」にインバウンドの方々を魅了する不思議な路地があります。その何気ない路地に、多くの外国人観光客の方々がカメラやスマートフォンを向け、興味深々な様子で路地の奥を眺めています。京都人に説明するならば、老舗の洋食店がある路地といえはわかるかもしれません。

三つ葉のクローバーとyasakaのロゴのタクシー・ハイヤーや観光バスでおなじみの会社で、京都へ進出される企業の事業所や店舗の誘致を専門に取り組んでいます。京都で仕事をする上で、「京都を読み解く鍵は〈近代京都〉にある。」そんな確信を持っています。「京都地籍図」と「京都市明細図」が〈近代京都〉を知る基礎資料になります。特に「京都市明細図」はWEB上で公開され便利になりました。例えば、二条城前の「旧京都国際ホテル」の敷地は福井藩邸跡として知られていますが、調べると大正期は「三井邸」であったことがわかります。「三井八郎右衛門高棟伝」によると、実は江戸期から「油小路邸」と呼ばれた三井本邸で、幕末に藩邸確保に苦心した福井藩が、豪商三井家の本邸を借り受けたというのが事実のようです。幕末の福井藩主といえば政事総裁職として活躍した松平春嶽です。二条城の前は最高の立地だったでしょう。報道によると三井不動産が取得し、高級ブランドのホテル誘致に取り組んでいるとのこと。旧三井本邸跡という歴史的経緯をふまえるとゲニウス・ロキを感じずにはられません。景気に左右されない、京都の都市格を高めるホテルになることを期待しています。

明治大正期の地元紙「京都日出新聞（現在の京都新聞）」を読むと当時の京都人の将来を見据えた都市基盤の整備やまちづくりに対する考え方を知ることができ、進取のスピリットが直に伝わってきます。京都の観光都市としての取り組みは、1869（明治2）年に太政官が東京に移され、天皇の東幸により京都御所周辺が「狐狸の棲家」となったところからスタートしています。京都を彩る観光要素は全て明治・大正・昭和期に誕生しているといっても過言ではありません。あの清水寺でも名所化して多くの参詣者を集める目的で明治期に境内の雑木を伐採し桜や楓の計画的な植樹を行ったことが寺史に記されています。近年注目を集める京町家も「京町家まちづくり調査」（平成20・21年度）で47,735軒が確認されていますが、江戸期以前に建築されたものは全体のわずか2.1%です。石塀小路や二年坂の京都らしい町並みも明治末期から大正期に建てられたものです。

冒頭でご紹介した二年坂の不思議な路地に面する角地で高塀造町家（伝統的建造物）の活用に取り組んでいます。「世界に展開する店舗のなかでも、この店は日本を代表する店舗にしたい。」「ブランドマネージャーを本国から呼びコンセプトを造り、建物に合わせて全てカスタムメイドで対応します。」京都を特別な事業地と考えていただいているテナント企業の方々と想いを実現する仕事です。各町内にそれぞれの歴史とまちづくりへの想いがあるのが京都です。仕事の舞台が京都である醍醐味を日々実感する今日この頃です。



彌榮自動車株式会社 不動産課長 熊谷 保
(京都産業大学 日本文化研究所 上席特別客員研究員)

震災の日に想いを寄せて ～元気なシニアベンチャーがいっぱい～

今日2017年1月17日。新聞の朝刊に6434本のろうそくが点灯し阪神淡路大震災の追悼の美しくも荘厳な写真が掲載されている。22年前海を隔ててすぐの堺で強い揺れにビックリしてとび起きた。次々と映し出されるテレビの映像に目を疑った。芦屋にはイマジン研究所の役員である師匠百々達郎（VEC関西支部、初代支部長）又、仲の良い会計士 木村隆氏、歯科医 高木先生がいる。まず安否確認の為私が紙に名前を書いて心を落ち着かせて「フーチ(波動測定装置)」でダウジングを試してみた。百々先生の波動は全く動かず「あかん、これはひょっとするとダメかなあ」それ以外の方々は皆元気そうです。

数日後西宮北口から歩いて芦屋に！先生は木造の古い日本家屋の1階で下敷きになり奥様は入院され先生は目に沢山埃が入り、しばらくは視界ゼロだったらしい。

近くのマンションに避難されていた。先生によく似た娘さんが早やワザで東京からご主人と来られてマンションの水の流れない便器の大掃除を手できれいにされていた。さすが百々達郎の娘さんでした。その日私は20年間営業してきた店が全壊となり数千万円の損失と仕事を失った。そして働いてきた北新地を卒業となった。

さて、折角書き始めたのだから最近の情報を聞いて下さい。80歳すぎた元気なベンチャーおじさんを紹介します。何度も書いてきた空気利用の発電機(120K 6台)はいよいよ日本に上陸したよ。勿論作っているのは米国、何でアメリカに持っていったのと皆さんからお叱りを頂きますが、日本でのシュミレーション直前に各省庁よりストップが入り、昔トランジスタラジオの開発で商いをしていた彼のパートナーがマサチューセッツ工科大学に持込み規格まで取得した。これから日本でどう育てていくか応援宜しく頼みます。もうおひと方のおじさん、油の水まし、エコ燃料(加水燃料)を作っておられて石油会社を立ち上げました。これから上場予定で投資家を募ります。大学機関との連携で学術的な裏付けをやらないといけないので百戦錬磨の経験者を社長にと考えている様です。他には知識多くて知恵ない若者に日本古来の忍者学を教えたいおじさんもいます。又、奇跡を呼ぶ寝ているだけで重篤な人が元気になるベッド。勿論セラミックです。温度は65～70度と高いけどそれをあんまり感じない。年末になんと厚労省の認可取得したと情報入りました。この方も81歳です。大阪のオバサン、ますます元気でやりました!! 皆さん交流会でお会いしましたらお声をかけて下さいネ。お陰様です!! ありがとうございます!!

記・H29.1.19 イマジン研究所 代表 廣田 典子

～VEC関西より～

- ・2月は、日本列島冬真っ只中でありました。その中で北野天満宮に梅を見に行ってきました。桜と違ってピンクと白で上品にひっそりと咲いていました。その東側には京都ご花街の一つ、上七軒の街並みが軒を並べ、髪結いさんに行くのか普段着の着物で舞妓さんが二人歩いていました。京都ならではの風景を楽しんできました。春はもうすぐです。(本田)
- ・毎年の確定申告・・・今回は初めてe-Taxで申告書作成して会場に持って行きました。今まで面倒だなあ～と思っていましたが、やってみると簡単！何でもっと早くしなかったらどうと、(皆様はされてると思いますが)会場では長蛇の列で、まだまだ浸透して無いんだと改めて感じました。私は並ぶことも無くスムーズに終了。(藤本)
- ・自分磨きのため「色彩」に関するセミナーにはなるべく参加するように心がけています。今回は「色彩心理学と上手なつきあい方」をテーマに研究方

法・データ解析と私にとっては大変面白く2時間半の講義はあっという間でした。違った視点からみた色彩心理学の世界は今後の自分には是非とも役立てたいと思っています。(濱本)

- ・柳野嘉秀様には5月の交流会で詳しくご講演頂きます。ご期待下さい。熊谷様は京都検定1級合格者で京都は精通されていますのでまた情報をお願いしたいと存じます。廣田様のご寄稿にあります百々氏(故人)は初代VEC関西支部長として貢献された恩人です。3月号も「てんこもり」となりご協力有難うございました。(澤村)

<交流会の予定>

平成29年4月10日(月) ウエストユニティ株式会社
代表取締役 福田 登仁 様

一般財団法人 ベンチャーエンタープライズセンター関西支部
〒541-0053 大阪市中央区本町2-3-6 本町ビジネスビル9階
TEL 06-6263-0366 FAX 06-4964-6293